
赤茨の蒼

麻雷緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤茨の蒼

【Nコード】

N0016L

【作者名】

麻雷緋

【あらすじ】

生まれ出でる前の可能性。自ら性を選べるとしたら……。絢子か殉矢か？ その先を知る術は、彼らと共に綴られた此の物語に踏み入れる選択だけ。

序幕：闇夜に告知（前書き）

主人公『水瀬絢子』は中学三年で、現在は青春学園男子テニス部のマネージャー業を努めている。

季節は夏。既に七月も前半が過ぎ関東大会は幕を閉じた。

真面目に受験勉強を進める一方、小説を読みふけるなど絢子にはマイペースな一面も見受けられる。

二次創作に掲載される事を祈ります

（こちら諸事情により記載）

序幕：闇夜に告知

湿り気を帯びた風が街路樹を揺らし微かに残っていた雨の雫と共に、寄る辺を奪われた葉が闇深い空へと舞い上げられる。

道行く人の波はまばらで、皆一様に僅かな光を求めては方々に散って行く。

そんな中まるで何かに誘われるかのように、私だけが光を避け闇へ闇へと歩を進める。

（こんなに遅くなるつもりはなかった。本当はもっと早く切り上げて帰る気でいたのに……）

私は肩に掛かる重みを少しでも和らげようと、鞆の延長線上にある肩紐を何回か右手で調整してみる。

普段なら到底苦痛に感じる事のない家までの距離が、今夜はやけに遠く無気味とさえ感じられた。

不意に空を仰ぐと、月は元より星の一つも見えなかった。

雨上がりの地面はそこかしこの窪みに水を溜め、時折それに足下を取られる。

「もっつ！」

軽く爪先で地面を叩き、靴に付いた水気を払う。

それでも、完全には払う事叶わず足首の辺りが微かに冷たい。

後方からは車の近付いて来る気配。

先程まで連なっていた街路樹や植え込みは途切れ、車道と歩道の中腹に水溜まり。

（この上、更に泥水を跳ね上げられる何て考えたくもない！）

私は飛び退くように車道を離れ、そのままの勢いで一気に階段を駆け上がる。

「 ツ！ハア…ハ…」

途中で取り落としそうになった鞆を地面に下ろし、乱れた呼吸を整える。

何も急ぐ必要はなかったのに、気が付けば階段を一息に駆け上がっていた。

当然ながら呼吸は苦しいし、肩も痛い。

全て図書館で済ませ特別借りてくる予定でもなかった為、鞆の中には下校の際放り込んだ参考書やノート類が入っていた。

加え、読みふけた挙げ句小説を何冊か借りてしまったのでそれ分も加算される。

(それにしても、失敗した)

樹海のように木々の覆い茂った公園を眼前に、私は落胆の溜め息を吐く。

公園と呼ぶにはあまりの惨状に、改めて眺める気にもなれない。

カラースプレーで派手なペイントが施された遊具に、此また派手に破壊されたかつては水飲み場だった物。

公衆トイレに至っては内側は綺麗に管理してあるものの、外側の壁には痛々しい傷や落書きの跡。

それから、至る所にプリクラが貼られていたりする。

言わば、この公園は無法地帯のような物で極めて危険。

それも夜の闇が深い今日みたいな日は特に避けて然るべき。

風が鳴った……。

スカートの裾を軽く手で抑え、巡らせていた視線をベンチ脇の心許ない灯りへと向ける。

「どうしたの？千石君」

「…えっ？可つ笑しいなあ。もうこんな場所に来る子は居ないと思っただけど」

彼にしては何とも弱々しい言い方で、笑い顔さえ様になっていない。

良く見ると口の端に血が滲んでいた。

反射的にハンカチを差し出す私に、千石君は「大したことない」と言っただけで再び苦笑いを浮かべ暫くの間何も話そうとしなかった。

何故か私はそのまま立ち去る気になれず遠慮がちにベンチの隅に腰掛け、時折風に揺れる木々を眺めていた。

とても静かだった。

昼間と違い耳に付く蝉の声も聞こえなければ、道すがら談笑する大人達の声もしない。

聞こえるのは木々のざわめき、風に混じって微かに犬の遠吠え。あまりに静か過ぎて、何だか闇に溶け消えてしまいそうな気さえする。

勿論、それが単なる錯覚だという事は理解している。けれど今この場に在るのは闇と静寂。

ならば本当に溶け消えてしまったとしても何ら不思議ではない。

何時しか私は、うつとりと闇に魅入っていた。

不意に傍らで何かが動く気配。

次いで右肩に重量が掛かる。

「……の、合宿」

「？」

「来月に予定されてるんだよ。合同強化合宿って 知らない？」
私の肩にもたれ掛かったまま、唐突に彼が話し始める。

関東大会を終え、来たる全国大会へ向け各校で切磋琢磨しようとする顧問の間で計画がなされているのだと。

けれどそれは男子テニス部のレギュラー陣に限った話で、その他顧問以外は参加資格を持ち得ないと。

返す言葉が見つからなかった。

私は青学男子テニス部のマネージャーとして、その事実を知らされていない。

（女子でテニス部員でない私は、みんなの足手まといだから？）
当然と言えば当然だ。

強化合宿にレギュラーでも、ましてやテニス経験すらない部外者が立ち入ればどうしたって水を差す結果に至るのだろう。

その上、私は中学三年で今月は既に七月の半ばを過ぎ受験勉強に本腰を入れると言われればその通りで。

だから余計に、何も言えなくなつた。

「俺、合宿に絢子ちゃん連れてつちやおゝかな？」

「…ありがとう」

本気で言ってるのか冗談なのか、確かなところは分からない。

分かっているのは、私が合宿に参加する資格を持っていないという事だけ。

序幕：闇夜に告知（後書き）

ご一読感謝致します。

今回投稿するにあたり、初の連載作品が一区切りついてから始めようかとも考えました。

けれど書きたい物が書ける状態にある今だからこそ、色々な話を書いて行きたいと思いついた次第です。

それでは、

次の幕へとお進み下さい

第一幕：意思の確認（前書き）

絢子は両親と三人暮らしで、料理は割と得意な方だ。

食はそれ程細くはないが、逆に大食らいでもない為食後などは時折腹部を気にしたりもする。

第一幕：意思の確認

目覚めは必ずしも良いとは限らない。

それが雲一つない澄み切った青空であっても、例外には成り得ない。

何より身に着ける制服が学ランに置き換えられ、両親に揃って名前を間違われるなど有ってはならない。

その上、鏡に映った自分が男に

昨夜までそこに映っていた水瀬絢子。

それが今朝になって水瀬殉矢に成る。

(到底有り得ない。なら、これは現実じゃない)

とはいえ、現実への戻り方など知る筈もない。

取り敢えず洗顔と歯磨きを済ませ、再び食卓に顔を覗かせる。

普段なら寝ぼけ眼を擦りながら弁当箱と格闘している母が、既に弁当の支度を終え朝食の配膳まで始めていた。

チーズトーストにハムエッグとカフェオレというメニューから察するに、今朝は珍しく母の希望が通ったのだろう。

「いえ、僕ならどちらでも。何なら明日は母さんの代わりに僕が作りますよ?」

和食を好む父と洋食を好む母。

僕の返答がよほど嬉しかったらしく、母は満面の笑みで僕の頭を撫でた。

特に違和感なく会話が成立し、内心複雑な思いではあった。

これが本来の在りようで、今までが夢か何かだったのではないか?

しかし、絢子としての記憶は確かに存在し殉矢としての記憶は逆に曖昧だ。

こうなると、学園に行き別の誰かとも会話をするべきか。

学園に着くまでに、海棠君と乾君の姿を見かけ軽く挨拶を交わした。

海棠君は『水瀬…』と口にしたきり余所を向いて黙り込んでしまった。

一方乾君の方は常と変わらず堅苦しい姿勢を崩さず、笑みも特別浮かべる事はなかった。

それをどこか寂しく感じてしまうのはやはり絢子として接していたからか。

ではこの姿、殉矢はいつたい

「殉矢先輩！おはよー御座います！」

不意に小柄な女子に腕を引かれ、そちらに顔を向けると口元に笑みを浮かべ上辺遣いに覗き込んでくる瞳とぶつかった。

普段越前君にべったりな朋香ちゃん。

今朝は後輩として以上に可愛らしく感じられ、挨拶を交わすだけなのに何故か顔が熱い。

そんな僕達の横を乾君と海棠君が通り過ぎて行く。

乾君は呆れ顔で、海棠君に至っては既にこちらを見ようとすらしなかった。

これ以上校門前で突っ立っている訳にもいかず、朋香ちゃんと腕を組んだまま昇降口まで向かう。

途中越前君や桃城君辺りに出会すかと思っただが、遂に昼休憩まで二人とは話す機会すらなかった。

そうして午前の授業は的外れな程、何事もなく過ぎて行き。

「その分だとまだ物足りないだろ？」

「殉矢先輩太っ腹！んじゃ遠慮なく」

屋上に腰を下ろし案の定弁当とパンをがつついていた桃城君と越前君に食料を差し入れると、その端から桃城君が弁当を空にしパンをパンをと次々に平らげていく。

それは、今までが今まででなだけに持参した弁当ですら手に余る自分が異常なのかと思わせる程に凄まじい光景だった。

(これに関しては、多分何回見ても慣れないだろうな…)

見てるだけで苦しくなってきたような腹部を軽く抑え、思わず立ち去りそうになる。

いや、当に要は果たしたと立ち去りかけたのが本当のところか。振り返るとそこには越前君の不機嫌な顔があり、仁王立ちした彼は真っ直ぐにこちらを睨み付けていた。

背後の桃城君は面白い出し物でも期待しているのか、好奇の視線を向けてくる。

「外見と中身が合っていないんじゃない？」

「…!？」

何故知っているのか。

彼は目の前に居るのが殉矢ではなく絢子だと理解している？
有り得ない。

例え今が現実でなく夢だとして、どうして彼にそれが判断出来る？

やはりこれは夢なのだ。

夢であれば彼が理解出来たとしても何ら不思議じゃない。

自らが見る夢なら、登場人物にも関与する事が可能なのだから。そう確信した瞬間、屋上が校舎が深い闇へと消えて行った。

『それだけ意思が強いのなら…』

どこかから声が聞こえ、不意に自分の姿が見えるようになった。勿論、本来在るべき性の水瀬絢子としての姿。

思わず安堵した。

途中から殉矢としての感覚が強くなり自らの存在が不安定だったから。

けれど、夢と呼ぶにはあまりに

『今はまだ、その時ではない』

再び声が聞こえた。

そして声の主が殉矢だと思に至る。

私であって私でないその声は、先程まで皆と交わっていたものだ。しかし、言っている意味が分からない。

分かっているのは、到底現実には成り得ないが可能性としては本来存在していた逆の性。

生まれ出でるより更に前の可能性。

人を含め、恐らく大半の生物が自らの性を選ぶ事が出来ない。

仮に可能だったとして、本当に選び取る事が出来るのだろうか？

幕間：招集と再声（前書き）

恋愛に特別関心がないのか絢子は同校他校問わず、皆とは比較的公平な関係を築いている。

時期的には既に夏休みに突入している。

幕間：招集と再声

講堂の外の壁にもたれ掛かり、読み途中だった小説に視線を滑らす。

既に夏休み期間に入っているとはいえ校舎の至る所で、部活練習や補助に励む姿が見受けられる。

本日の男子テニス部は各自自主的な練習に励むようにと、事実上練習は休み。

理由は来月に予定されている合同強化合宿の招集が各校に降り、青学の講堂にてそれが行われるからに他ならない。

当然マネージャーの私に呼び出しなどはなく、本来であればわざわざ休みに学園に来る必要もない。

最も、受験勉強の為に図書室を利用したり教室に入り浸ったりするのが目的で登下校する生徒も少なくない。

それがマネージャーとして自主練に来た部員を案じてとも取れるが、ならば何故こんな場所に居るのか。

私に至ってはそのいずれにも該当しておらず単に来たいから来、居たいから居るのだ。

(代表者は何も、部長でなくても構わない訳か…)

指の間に挟んだしおりを一瞥し、関心の逸れた小説にそれを戻すと瞼を閉じる。

途端に蝉の声が煩わしく感じられた。

「期間は来月、八月十一日から十七日の一週間を予定している！各校の参加人数及び参加者はこちら側で決めさせて貰った！」

「詳しくは先程皆の手元に配った資料に明記されている。各自良く目を通して置くように」

竜崎先生をはじめ、各校の顧問が順に説明を述べ上げていく。集まった当初に比べると、講堂内はにわかになじめていた。

「えー 場所が場所なだけに遊び半分で気を抜く事がないように、各々常以上に気を引き締め合宿に臨んで下さい」

合宿場所は通常青学が使っている合宿所でもなければ、最新設備の整ったテニス専用施設でもない。

そこは絶海を一望出来る大自然に築かれた合宿所。

「そこでえ〜…。みんなには半サバイバル生活を兼ねた合宿をして貰いたいので…」

説明を受け、一通り資料に目を通したところで各校代表者はそれぞれ疑問点や意見を出し合った。

先ず第一に、安全面と合宿所に設けられた設備の補足説明を顧問側に求めると共に交通機関やそこに掛かる費用についての申し立てをする。

次にそれぞれ用意しなくてはならない物の選別や席順など、その他諸々。

講堂の扉が開き、各校の代表者が何かしら会話を交わしながら外に出て来る。

私は特に誰かを待っていた訳でもなければ、顧問の先生方に見咎められるのも本意でない。

(とはいえ、先生方が未だ中なら隠れる必要はないか)

それは同時に、この場に残る必要がなくなつた事を意味していた。取り敢えず不二君と大石副部長をやり過ごし、私は校門目指して歩き始める。

「半サバイバル合宿かあ……」

「剣太郎、何落ち込んでるんだ？ここは海だー！バカンスだー！つって喜ぶとこだろ」

前を歩く二人は一年生部長の葵君と三年の黒羽君だ。

ダジャレ好きの天根君がいないと、少しだけ静かな六角中。

その僅か先に行く山吹中はやはり部長の南君と千石君だ。

後は立海の柳生君と柳君に、氷帝の跡部君と向日君。

（不動峰の彼らも確か）

「費用の大半負担してくれる何て、良かったですね？橘さん」

「ああ。おい！誰かを探してるのか？」

振り返ると、そこには不動峰の神尾君と橘君の姿があった。

私が『道理で見当たらない筈だ』と苦笑混じりに口にする、

二人は驚いたような照れたような顔をしていた。

その後、私は合宿の話題には敢えて触れずにマネージャー業にのみ専念した。

勿論、練習の合間を縫って受験勉強もそれなりにこなし気が付けばもう数日後に合宿日が迫っていた。

私にとっては関係あるけど関係ない。

実際、自らが参加しないのだから出来るのは皆の無事帰還を祈る事だけだ。

そういえば、あの日以来見ていない。

私が鏡に映った男の自分を見て、それが本来の性と錯覚したあの夢。

あれが現実に成り得るなら

『強化合宿に、潜り込めるかも知れない』

指の先で唇をなぞってみる。

恐らくは私自身の口。

けれど、今の声はその口が紡いだ。

私は何時から夢を見ているのだろうか？

不意に鏡台に手を伸ばしカバーを外すとそこには私が映っていたが、様子が妙だった。

動かしていない筈の唇が、同じ言葉を繰り返している。

『記憶を辿れ。明後日、電話が鳴る』

これは現実。

辿るのは夢か現実か、どちらの記憶？

私が絢子で在る為に、僕が殉矢で在る為には何が必要なのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0016/>

赤茨の蒼

2010年10月11日00時59分発行